

鹿子京
鹿子京
鹿子京
鹿子京
鹿子京
鹿子京
鹿子京
鹿子京
鹿子京
鹿子京

京鹿子

5月号

抱卵中
丸山佳子

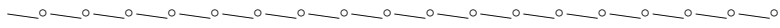


こはいもの見たさに深雪トンネル抜け

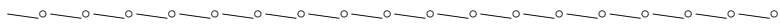
木の芽風が仲間われさす鳩の群れ

遠くから盗み撮りされ抱卵中

初筐子いま発声の練習中



人	鏡	粹	紫	送	あ
嫌	に	す	陽	ら	あ
ふ	も	ぢ	花	う	尊
蛇	慣	の	に	か	し
と	れ	お	ひ	逢	密
相	き	集	と	は	教
性	て	り	色	う	い
合	ま	ら	貫	か	ろ
ふ	白	し	ひ	久	の
不	髪	い	句	し	花
思	洗	白	集	バ	菜
議	ふ	襖	映	レ	畑
			ゆ	ン	
				タ	
				イ	
				ン	



豊田都峰

清響集 その六十一

遠回りして野の梅のまだ固し
おほでらや春への祈りの燭ならべ
いしだたみ髓まで濡れて春めけり
紅梅をさきがけとしてほとけ道
恋猫や月代ころの屋根の上
神名備に発する川や稚鮎汲む



鮎上るころは野風にあそびごろ
門灯の小さき暈きる春の雨
かたくりの咲けば林の透かす嶺々
日表の土手のものなるよもぎ餅
こんじきの開帳百のきざはしゆく
漣りの波紋を重ねぬる岡辺
梅季に咲いて信じられてゐる
水草生ふあたりにかかる土橋かな

秀華採集

ほつほつと省略ぎらひの寒ざくら

村田 富美子

寒桜の咲き時や咲く状態を考えると、花数の少なさなどふとももの足りなさを思うが、それは人間の勝手。「省略ぎらひ」の措辞が寒桜の命を写してよい。

山鴉加へ枯れゆくものばかり

金子 野生

採りたての牡蠣を海ごと呑みこめり

直江 裕子

山鴉を加えること・海ごと呑みこむことと、ともに一つのものを選び出して表現したことにより、表現意図が具体的に読むものに迫ることになる。俳句は一つを選ぶことである。

鈴鹿 仁

芽あぢさゐ

三徳の風の中なる芽あぢさゐ
佛心に触れてみたくてさくらの芽
ものの芽の飛び出す構へ無人駅
一鬼棲む山を目指せば山笑ふ
亀鳴いてふしぎな国へうさ晴らす
触れあはぬまま一と日過ぐ夕ざくら
春雨の心願の山余韻めく

近 詠

宇都宮滴水

花筏

漂うていろはに昏るる花筏
記すほども無きてん末や柳の芽
遅ざくら傾ぐ羅漢の眠り癖
生誕の意味の一つに蜷のみち
振り向けば霞に消えし鳥の声
たんぽぽに壊れすぎたる陽の欠片
いちにちの余白を埋むさくら蕊

神麓集



寒餅を今年も搗けて古希祝ふ
 隙少し見すも処世や春寒し
 義理チヨコで上辺つくるふバレンタイン
 寒餅が搗けて戦後を噛みしめる
 謙遜も遠慮も八分春寒し

岩崎 憲二

石垣の湖の住まひの寒椿
 地に降りて嘴逞ましき寒鴉
 山川の寒を引き締む橋の反り
 寒林を見上げて抜けて細く生く
 大寒の河の蛇行を眩しめり

松本 鷹根

料峭の遊具はどれも動かざり
 料峭や物言ひたげな犬の顔
 料峭を耳の穴から拾ふかな
 料峭や見知らぬ街をさまよひぬ
 料峭や生きる証しに病んでをり

柴田 朱美

感懐の音ころがしてゆく冬ドナウ
 樂聖の森一月の心置く
 冬銀河女系の城の金ベツト
 胡桃割る中は悲恋のワルツかも
 冬霧のドナウに旅情の髭濡らす

服部 郁史

春の雪深々たりし師の命日
 春の雨半旗のごときわが心
 紅梅を育んでゐる弥陀の雨
 恋猫の風邪押し切つてとび出せり
 餌はあるやと恋猫を誘ふ雌

高木 智

偽らぬ眞紅の主張寒椿
 被ひくる白ふりこぼす寒椿
 寒ごもり指紋の渦に巻き込まる
 寒晴れや雲が食べたくなる茶房
 霏々最中兎のやうな児等跳ねる

荻野 千枝

神麓集



春支度 森津 三郎
掉尾とす時晴れの師走句座
北山の初雪積にうどん喰ふ
新調の袖無しの犬余所見せず
敷石をしめらす程の時雨する
銀行の前のバス停春支度

麗月 丸井 巴水
黒を着て冬の終はりの日曜日
山の神術を外せし年の豆
カレー屋に彼の集団のアノラック
麗月の香る参道まぎれなし
心地よさ錯覚にゐて二月なり

ランナーの一人が転びはや三日
音たてて筋書崩る大寒波
恋心捨てず使はず菜を洗ふ
体重の増えてゐさうな山眠る
もう誰の世話にはならぬ枯尾花

松田 都青

五月の森 竹貫 示虹
隆き胸街路潤歩の五月來る
近づけば山頂見え若楓
源流に若葉透かしの深空あり
落葉松の新樹の道やふりむかず
初戀も昭和も遠し五月の森

逢瀬の小径 北川 孝子
この犬と逢瀬の小径犬ふぐり
賀茂川を均す島影寒九かな
寒極むわれに問ふことまた増えて
大寒の根無し雲行く嵯峨野かな
父しのぶ夜となりけり追儼星

だしぬけに少女等の声水仙郷
日脚伸ぶ納屋にもろみの匂ひ充つ
芽吹く木の枝が突張る四次元
春立てり屑籠に破れ鬼の面
春暁や酸素吸入器の水の音

川崎光一郎



京鹿子集

豊田都峰選

京都 村田富美子

ほつほつと省略ぎらひの寒さくら
埋火にふれて無口をよそほへり
隨身の弓矢たづさへ寒を締む
鳥居より高き橙裏参道

青梅 金子 野生

風花の舞ふや祇王の影追へば
野良猫の三つ指ついてゐる淑気
ほんたうの顔をうつつさぬ初鏡
人日や佛具屋の売る瘦せぐすり
是非問はなたやすく折れてしまふ葱
山鴉加へ枯れゆくものばかり
採りたての牡蠣を海ごと呑みこめり

千葉 直江 裕子

凍鶴の祈りにも似て足替ふる

生きるでもなく風に凭る冬の蝶
男物のセーター借りて訃をしきる

梟の淋しきときも目をひらく
雪兎月へ棲むまで目の赤き

神鏡から枯野の舟が漕ぎ出せり
霰ぼろんぼろんぼろん無限

雪深し一と夜地熱の噴かむかな
むさし野の端から液化寒夕焼

春の灯に透く乾杯のロゼワイン
早春の漣は銀の折鶴

千葉 伊藤 希眸

佐々木紗知